世界遺産はストーリー性・多様性を重視する時代に

世界で940件近い世界遺産が登録され、世界遺産の「価値評価」も少しずつ変化しつつあります。そうしたなかで重視されているのが遺産のもつストーリー性や文化の多様性であり、それは観光のあり方にも大きな変化をもたらそうとしています。長年にわたって日本イコモス国内委員会で委員長を務めるなど、世界遺産にかかわってこられた西村幸夫さんに、世界遺産の価値評価の変化と観光のあり方を伺いました。

東京大学大学院教授
西村幸夫

インタビュアー・城市　創

遺産の背景にあるストーリー性を重視

◎今年の6月には「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―」と小笠原諸島が世界遺産に登録され、日本の世界遺産は14件となりました。

西村：世界遺産は1972年にユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づき、全世界の人々の共有財産として国際的に保護・保全していくことが義務付けられている「遺跡」や「建造物」、自然などのことで、6月現在、世界で936件が登録されています。

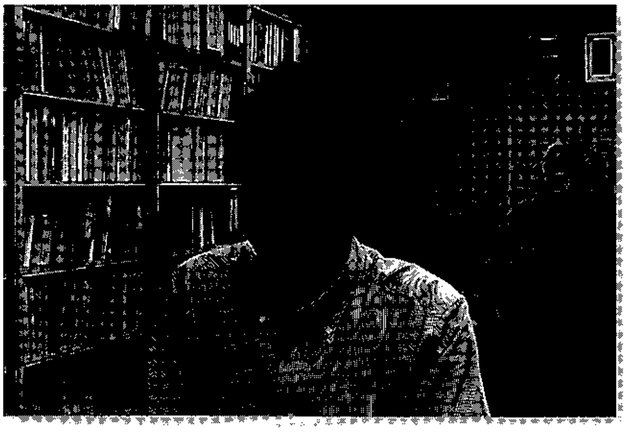
世界的にみると、当初は存続の危機に瀕している遺産が中心でしたが、少しずつ文化の多様性を示すような遺産が増えてきています。しかも、モニュメントの多様性だけではなく、遺産の背景にあるストーリー性が重視され、文化の持つ意味をきちんとストーリーとして示すことが求められています。

仏教伝来からの都市形成が評価された平泉

◎ストーリー性とは具体的にはどんなことでしょうか。

西村：今回世界遺産に登録された平泉では、中尊寺や毛越寺庭園、観自在王院跡、無量光院跡、金鶏山などが構成資産となっていますが、個々の構成資産の価値だけでなく、これらが現世における仏国土（浄土）の空間的な表現として創造されたということが高く評価されました。

6世紀から12世紀にかけて中国・朝鮮から伝来した仏教は、日本古来の自然崇拝思想などと融合しつつ、独特の性質を持つものへと展開しました。その中でも、末法の世が近づくにつれて興隆したのが極楽浄土信仰を中心とする浄土思



プロフィール
にしむら・ゆきお
1952年福岡市生まれ。東京大学大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、96年より東京大学教授、2011年より東京大学副学長。この間アジア工科大学助教授（バンコク）、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任。

世界遺産の構成資産である無量光院跡（写真提供：（社）平泉観光協会）

想で、その思想に基づいて空間的に創造されたのが仏堂・浄土庭園をはじめとする一群の構成資産です。

そこでは、仏教とともに受容された伽藍造営や作庭の理念、意匠・技術なども、日本古来の理念や技術などと融合して、固有の理念、意匠・技術へと昇華しています。

つまり、一群の構成資産は、寺院の建築・庭園の発展に重要な影響を与えた価値観の交流が結実しており、世界的に見ても建築・庭園の分野における重要な価値を示しているということです。そういうストーリー性が今回の登録の大きな要素になったと思います。

ストーリーを明確にすることで進んだまちづくり

◎そういうストーリー性を重視するためには、地元の人たちの認識を変えることも必要となります。

西村：平泉は2008年に登録延期の勧告を受けました。これは地元にとってはショックでしたが、それ以降、世界遺産としてアピールすべき価値は何かを徹底的に議論、検討してきました。前回は、京都に匹敵する都、文化の存在をアピールしようと多様な構成資産を取り込みましたが、イコモスからの提言もあって構成資産を絞り込み、ストーリー性をより明確にしました。その分、世界遺産に向けて努力されてきた周りの人たちは辛い思いをしたと思いますが、平泉が持っている価値の高さは不変であることを認識してくれました。

それと同時に、藤原時代の遺構の上に現代都市があるという認識が高まり、かつての都にふさわしい街を形成しようという意識が高まりました。駅前や商店街などでは厳しい景観規制が進められ、現代的なまちづくりという面でも大きな成果があったと思います。こうした点では、延期勧告は世界遺産とまちづくりをじっくり議論・検討する良い機会になったという面もあったと思います。

ストーリーを重視すれば観光スタイルも変化

◎世界遺産はストーリー性や多様性の重視という第二段階を迎えて

毛越寺の浄土庭園にある遣水

いるというお話でしたが、観光のあり方も変わってきますね。

西村：変わると思います。これまでの世界遺産は世界的に非常に珍しいモニュメントなどが中心で、観光客はそれを目にするだけで圧倒され、満足してきました。

　しかし、第二段階を迎えると、世界遺産の背景にあるストーリー性、多様性についての知識が必要となってきますし、そこから観光の新しい楽しみ方も生まれてきます。平泉では、中尊寺の金色堂や毛越寺の浄土庭園などが全国的な観光スポットとなっていますが、世界遺産として評価された「浄土思想に基づいて空間的に創造された仏堂・浄土庭園」という観点から見直すと、観光スポットの意義はぐっと高まりますし、他の観光資源の価値も高まってきます。

　例えば、登録資産になっている金鶏山は100mにも満たない山ですが、実は浄土思想に基づいて完成された平泉の空間設計の基準となった信仰の山のひとつで、代々の藤原氏は金鶏山を基点として自分の都を形成してきましたし、それぞれの都市軸も残っています。そうした意識をもって、のんびりと観光スポットなどを歩けば、観光客にとって新しい発見が生まれてくるのではないでしょうか。

観光資源の価値や意義をきちんと伝えることが重要に

◎それは世界遺産だけでなく、国内の観光地についてもいえることですね。

西村：ストーリー性を重視し、観光資源をブラッシュアップすることはどこでもできることですし、それによって市民による草の根活動とつながってくる可能性も高くなります。

　これは世界遺産だけでなく国内旅行でもいえることですが、団塊の世代が本格的に観光を楽しむ時代を迎えて、これまでのように駆け足でスポットをめぐる観光ではなく、ゆっくり時間をかけてでも知識欲を満たすような観光ニーズが増えてくると思います。

　そうすると、観光地にとっては、観光資源の価値や意義をきちんと伝えることが大切になってきます。

　最近は、世界遺産に登録された島根県の石見銀山をはじめとして博物館やビジターセンターなどがすごく充実してきています。非常に良いことだと思いますが、世界遺産だけでなく、それぞれの市や町、村にも情報発信の拠点となる博物館などを整備し、観光客などにもっと専門的な情報も提供できるようにすれば、知識欲を満たそうとする新しい観光スタイルにも対応できるのではないでしょうか。

信仰の山・金鶏山（写真提供：（社）平泉観光協会）